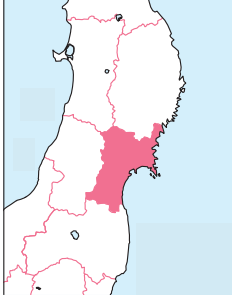


宮城県

まちづくりの形が見え 創造的復興へステップアップ

復旧・復興事業が本格化する中、宮城県は「震災があったからこそ」のまちづくりを目指しているといいます。震災直後から復興に奔走してきた宮城県土木部長の遠藤信哉さんにお話を伺いました。

復興は災害に強いまちづくりから新たなステージへ

「現在は、震災で甚大な被害を受けた市町の復興が、目に見えて進んできました」と手応えを語った遠藤部長。「たった5年でここまで来られたのは全国から応援に来てくださった方々のおかげです」と続けました。各自治体から支援に駆け付けている職員は、宮城県内で600人以上もいるといいます。

しかし、それでも震災直後のまちづくりは困難の連続でした。被災した市町の多くは直面する課題で手一杯。将来に向けた計画を考える余裕などありません。そこで県は「参考になれば」と新たなまちづくりの素案を数パターン用意し、市町に提案しました。

例えば、リアス海岸のため高い津波が直接襲来した沿岸北部の三陸地域には、高台移転の案を。なだらかな平地のため津波が内陸部まで到達した南部地域には、多重防御の案を。多くの被災地で土木関係の職員が不足していたため、結果的にこの素案が足掛かりとなり、市町の計画づくりは加速的に進みました。

「次に目指すべきは、創造的復興だと考えます。創造的とは、この震災をきっかけに新たなまちづくりのモデルを目指そうというものです」と遠藤部長。

その一例は、国が管理していた空港としては初の完全民営化となる仙台空港で、利用者数の倍増を狙います。他にも、広域防災拠点整備や医師不足に対応した医学部新設など、まち全体の課題や弱点を改めて見直し、さらに安全で魅力的なまちの実現に県をあげて取り組んでいます。

こうした創造的プロジェクトと同時に、被災事実を後世に伝えるための「3・11減災・伝承プロジェクト」にも県は力を入れています。次世代へ防災文化をつなぐための、語り部による防災教育。津波浸水高の表示板設置や津波資料のアーカイブ化など、多種多様な方法で記録保存とその伝承を推進しています。

「多くの人に震災の実態を知ってもらうだけでなく、各被災地域の記録を展示する施設をネットワーク化することも大切です。今後はネットワークの中心として、石巻市の南浜に国・県・市が連携し復興祈念施設の整備を進めていきます」（遠藤部長）

過去を受け止め、しっかりと記録しているからこそ、未来に向かって全力を出せるのかもしれません。宮城県の復興は、新しいステップへと歩みを進めていました。

宮城県土木部長
遠藤信哉さん

未来のために残す詳細な震災の記録

「記憶はいつか消えてしまうからこそ、記録することが大切」と語った遠藤部長。宮城県では土木部のみならず、各部局で震災と復興の記録をつぶさに取りまとめています。全職員から震災当時の個人的な体験を集めたという貴重な資料もあり、その価値は計り知れません。各種資料はウェブでも閲覧可能です。

東日本大震災 宮城の記録
http://www.pref.miyagi.jp/site/kt-kiroku/

1 駅や公共施設などでは震災時の様子を伝えるパネル展示も多数設置されている。
2 3.11減災・伝承プロジェクトの一環として各地で津波の浸水高表示を推進している。

地形に合わせた多重の津波防御と高台移転

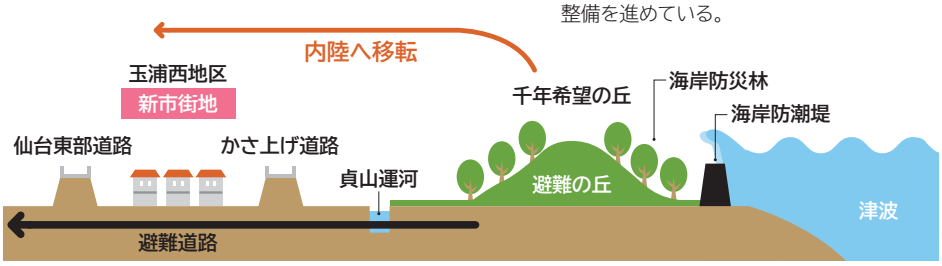
宮城県の沿岸部は、仙台平野に代表される低平地の南部と、岩手県沿岸部と連なるリアス海岸の北部で津波被害の性質が異なりました。各地域の特性と移転が必要になる住民の意向に配慮したさまざまな対策が進められています。

震災から5年の節目にあたり、完成するめどが付いた仙台湾南部海岸堤防※の完成式。東北地方整備局長（左）から村井宮城県知事（右）へ代行区間の引き渡しが行われた。
※国土交通省が施行していた直轄区間と、県が国へ復旧を要請した代行区間を加えた総延長約29㎞の海岸堤防

多重防御の第一線である完成した海岸堤防（仙台海岸／深沼地区）。巨大津波が越流しても粘り強く効果を発揮する構造となっている。

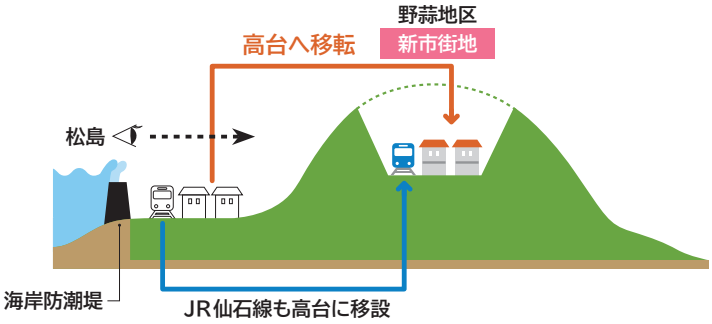
玉浦西地区（岩沼市）

岩沼市をはじめ広範囲が浸水した低平地の地域は、海岸付近の住居を内陸へ移転するとともに、津波を減衰する多重の防御施設の整備を進めている。



千年希望の丘（岩沼市）

津波来襲時に海岸付近の人が避難できる丘。あずまやのほろを降ろすと小屋になる。



野蒜（のびる）地区（東松島市）

高台移転することになったこの地区では、高台の造成が一段落し、移転住居の建設が始まっている。松島の景観に配慮するため、山の中央部をすり鉢状に削り、海岸側からはこの地区がほとんど見えないように計画されている。

JR仙石線が運転再開

東名駅と野蒜駅が高台に移転し、平成27年5月にJR仙石線全線開通。（写真提供／宮城県）

宮城県沿岸部を南北に走る三つの運河は、周辺の松並木と調和した美しい護岸風景で人々に愛されていたが、震災により破壊されてしまった。そこで津波防災意識の継承と魅力的な沿岸地域の復興を願った桜の植樹会が定期的に行われている。（写真提供／宮城県）